

軍用機の乗り心地はファーストクラス？

岩本友則

当時、イラクへの空路は封鎖されていたため、バグダッドに行くためには、海路と陸路で行くか、ヨルダン（アンマン）またはレバノン（ダマスカス）に行き、そこから陸路でバグダッドに行くルートしかありませんでした。幸い国連関係者専用で、バーレーンから2回/週定期便が飛んでいました。

抑留者がファーストクラス

1998年6月15日、アラビア湾に浮かぶ小さな島国バーレーンの国連事務所に、パスポート、現金、クレジットカード等の貴重品を全て預けさせられたのです。これでは、まるで抑留者です。

抑留地へは、右の写真と同じ型の輸送機で行きました。国連機は、白のボディーカラーに「UN」と表示されています。（次ページのヘリコプターの写真参照）



輸送機には客室は無く座席は、飛行機の両サイドに設置された布製のベンチシートです。そ

して、バグダッドの事務所に運ぶために積まれた大量の物資の輸送が目的で私達は、その脇に座っているのです。キャビンアテンダントならぬ操縦士から、搭乗頂きありがとうございますファーストクラスの旅を楽しんでくださいとの歓迎の言葉と、緊急時の対応等の注意事項そして機内に関する説明を受け、ヘッドフォン型の耳栓が渡され、ドリンクサービスは、ペットボトルを放られ、それキャッチするのです。さあ離陸、バグダッドを目指してアラビア湾を有視界飛行で飛んで行ったのです。

上空の寒さに耐えて焼け付く土地へ

バーレーンの気温48℃、飛び上がった飛行機の高度は分かりませんが、高度が100m上がる毎に気温は0.6℃下がります。薄着で搭乗したことから時間が経つにつれて機内の寒さが体に堪えたのです。旅客機と違って毛布の貸し出しはありません。機内は、耳栓をしても激しい騒音、当然会話などできません。トイレもカーテン1枚で仕切るだけです。非常に過酷な機内、二度と乗りたくない。しかし、日本に帰るためには、もう一度この飛行機に乗らなければならない。

この飛行機に乗ってアラビア湾を、約2時間半飛びイラクの砂漠の中のバグダッド近くの空軍基地に着きました。建物は、湾岸戦争の時に破壊されたままで、とても空軍基地とは思えない有様でした。そこは、焼け付くような強い日差しで日陰でも気温が50℃を越える凄まじい暑さでした。バグダッドは、地図の上では日本の福岡とほぼ同じ緯度なのですが、その暑さは桁違いです。日本の寒暖計は50℃が上限ですからその暑さがいかに大変か理解して頂けると思います。

軍用ヘリコプターの試練

査察に行くための手段は、通常車ですが、遠くの施設に行く場合(200km超)、ヘリコプターを使います。そのヘリコプターは、チリ空軍が提供しているもので、かつてアメリカがベトナム戦争（～1975年）に使った歴史的ヘリコプターです。（下記の写真）

ヘリコプターで査察に行く、ちょっとワクワクしたのですが、ヘリの扉を閉めないで、遊覧飛行ならぬアクロバティック操縦、これは遊園地のジョットコースターより迫力があり、スリルに満ちたものでした。加えて、騒音の大きさときたら前述の輸送機より更にデカく、乗っているのはとても苦痛としか言いようがないものでした。



ちなみに、このヘリの武器は全て取り外されており、イラク軍の兵士が一人同乗します。そして、査察の目的地に向かって飛んで行くのですが、私たちのヘリの後には、イラク軍の武装ヘリがついて来るのです。間違って機銃射撃でもされれば、終わりです。また、ヘリの航続距離は短くイラク政府の協力による燃料補給が無ければ、バグダッドの事務所に帰り着けないと言う悲しい国連活動の現状があったのです。

空から査察

このヘリを利用した空からの査察を紹介しましょう。このヘリ、高性能なガンマ線検出器を搭載し、上空からガンマ線 (γ) のサーベイを行うのです。

日本の原子力施設の常識は、核物質は、管理区域と呼ばれる放射線防護を徹底した建物の中で扱います。故に日本人のセンスは、上空から γ サーベイの意味が理解できないと思います。しかし、海外では、核物質を屋外貯蔵したり、簡易な建物の中で核物質を扱うことは、普通に行われています。それを、ネット (例: Google アース) から容易に確認することができます。

従って、未申告の原子力活動を手っ取り早く調査するための手法なのです。しかし、その技術に精通していないと誤った判断をしてしまいます。その例として、当時、雷対策としての避雷針にある放射線物質が使われていたことから、 γ 線のエネルギーを理解していないと間違った判断へと進みます。

その後幾つかの軍用機に乗りましたが、精密機器が搭載されている軍用機は快適であったことから、軍用機の目的により異なることを付け加えておきます。

続く